

2023年度(令和5年度)第2回千葉県体育学会大会 抄録

<一般研究>

体育授業における痛みの経験と安全の関係

○中野大希(筑波大学大学院)

本発表の目的は、体育授業における痛みの経験と安全の関係を再考することである。一般的には、痛みは怪我に伴って生じることもあるため、痛みの経験と安全は対立する関係にあると認識されている。本発表では、この認識の課題を明示するために、現象学的身体論に基づいて、体育授業における痛みの経験を考察した。その結果、事物や他者は、痛みの経験によって、児童生徒の身体に現れるようになることが明らかとなった。それらが身体に現れてこなければ、児童生徒の身体は事物や他者の動きに応じて運動を調整することが困難となる。それゆえ、痛みの経験は、児童生徒が事物や他者とぶつかりそうになる状況において、それらを避けるといった危険の回避を可能にしている。つまり、痛みの経験は、安全な運動実践を支えているのである。以上より、体育授業における痛みの経験と安全は、対立する関係であると同時に、前者が後者の基盤に位置づくという関係でもあることが示された。

運動会に関する議論の検討：課題の明確化に向けて

○伊藤鴻児(筑波大学大学院)

本発表の目的は、運動会に関する議論の課題を明確にするために、運動会の意義がこれまでどのように論じられてきたのかを検討することである。先行議論を整理すると、その意義は、これまで大きく二つに分けて論じられてきたことがわかる。一つは、運営に携わったり、同じ組の児童生徒と団結して戦ったりすることを通して、協調性が獲得されることである。もう一つは、学校への帰属意識が高められることである。これは、運動会の練習において、普段の学校生活以上に多くの他者とかわることによって、その学校の一員としての実感が高まることを指している。しかし、これらの意義は、文化祭や部活動などの活動にも共通して見出されるものでもある。したがって、運動会に関するこれまでの議論の課題は、運動会に固有の意義が論じられていないことであると示された。この課題を解決するためには、運動会固有の経験、すなわち運動会で実施される種目それぞれに着目して、その意義を明らかにする必要があることも同時に示された。

体育教師の「応答能力」に関する予備的考察

○坂本拓弥（筑波大学）

本発表の目的は、体育教師が有している「応答能力」を明らかにするために、その手がかりを探ることである。体育授業において今日推進されている様々なデジタル技術は、児童生徒の学びの選択肢を広げる一方、授業実践における教師の在り方に影響を与えている。それは、オンライン授業に顕著なように、教師がPCやタブレットに向き合い、目の前に存在する児童生徒の学習活動への「応答」が失われているという問題である。従来の体育教師の「応答能力」に関する研究では、その応答は基本的に言語的フィードバックとして捉えられてきた。しかし、言語的行為は多くの場合、非言語的行為と同時に起きている。そのため、体育教師の「応答能力」についても、非言語的側面に着目する必要がある。本発表では、その非言語的側面を体育教師の身体的能力として捉え、体育教師の「応答能力」をその身体の在り方から再考する必要性を提示した。なお、本発表はJSPS 科研費 JP23K12763 の助成を受けたものである。

これからの時代に求められる保健体育科教師の指導性のあり方―教師と生徒を対象にした混合研究法を用いて―

○野田勇紀（千葉大学大学院）

本研究では、生徒の要望を知った教師の授業中の言語行動を、指導観や生徒の要望と照らし合わせながら分析し、これからの時代に求められる保健体育科教師の指導性発揮のあり方について検討することを目的とした。

対象はA県A中学校の第2学年37名及びその中から体育愛好度をもとに抽出した生徒3名と、教職歴8年のB教師であった。また混合研究法の観点から第一検証を量的、第二検証を質的な検討と位置付け、分析・考察を行なった。

その結果、生徒の要望を知ったB教師は、自分自身の指導観を確信した上で、教師行動を起こしていたことが明らかとなった。そしてそこでの行動には、有効に作用する場合とそうでない場合とが存在するという両面性が存在し、生徒の要望と教師行動の対応関係が、教師行動の質を左右することが示唆された。このことから、教師が一人一人を見取ろうと尽力しつつ自らの指導性を発揮していく、個別最適な学びを保障するこれからの保健体育科教師の指導性のあり方が示唆された。

対話的な学びを引き出す協同学習の授業づくりー器械運動における運動・体育の好嫌の差異に着目してー

○小林慶（千葉大学大学院）

本研究では、運動・体育の好嫌の差異に着目し、それぞれの度合いの強さや理由を把握するとともに、どの生徒も活躍できる体育授業を、協同学習と対話的な学びの視点から検討することを目的とする。第一検証授業の課題を受け、「社会的スキル」（伝える・聴く・肯定的関わり合い）や男女のペア・協同学習の意図的な導入、自由記述による運動・体育の好嫌の理由の調査を第二検証授業で行った。

A市立B中学校第2学年の中のC組2名を分析対象の生徒として抽出した。単元は全12時間の器械運動（集団跳び箱運動）で、技や演技の美しさ、「社会的スキル」を単元のテーマとして扱い、発話分析を中心に行った。

その結果、協同学習を行う際に「社会的スキル」を意識づけることで、対話的な学びが促される可能性が示唆された。しかし、好嫌の差異によって「苦手な人を責めたりする人がいる」「周りレベルが合わない」「学習内容が簡単すぎ」など、他者との関係やレベルの相違に関して、運動・体育への満足感を得られない生徒が残ったことが課題となった。

15人制ラグビーにおける防御戦術の検討ー世界トップレベルと国内大学レベルとの比較を通してー

○廣瀬恒平（千葉県ラグビーフットボール協会）

ラグビーワールドカップ2019年大会および2023年大会において、南アフリカが優勝を果たした。多くの識者が優勝した要因に防御を挙げ、多くのチームが素早く前に出る防御を洗練させたと指摘されている。そこで本研究では、重要性が高まるラグビーの防御局面について、パフォーマンスとプレー成功との関連性を数量的に分析し、世界トップレベルと国内大学レベルの比較を通して、15人制ラグビーにおける有効な防御戦術について検討することを目的とした。分析の結果から、以下のことが明らかとなった。タックルアシストには相手に押し込ませない、またボールをつながせない効果がある。前に出でのタックルには相手に押し込ませない、また外されない効果がある。国内大学レベルは世界レベルと比べて、低いタックルが多い、タックルアシスト発生率は高いものの精度は低い、前に出でのタックルが少ない、タックル成功率が低い、上半身へのタックルによって外される比率が高い。

学生アスリートにおける心理的競技能力とフォーカシング的態度との関連—クローズドスキル種目選手とオープンスキル種目選手との比較—

○吉原啓（麗澤大学）

本研究では、日常生活のフォーカシング的態度と心理的競技能力との関連性について、競技種目特性（オープンスキル（以下OS）とクローズドスキル（以下CS））の観点から比較検討した。対象者は学生アスリート179名（OS種目140名、CS種目39名）、質問紙は体験過程尊重尺度（福盛・森川，2003）（以下FMS）と心理的競技能力診断検査（徳永・橋本，1988）（以下DIPCA.3）を使用。FMS及びDIPCA.3の下位尺度について比較したところ、OS群はCS群よりも、「勝利意欲」、FMS「距離」が有意に高く、「自己実現意欲」、「決断力」が有意に低かった。OS群においては問題に対して距離をとる態度がDIPCA.3の各因子と負の相関が見られたが、CS群においてはFMSの総得点、すべての因子とDIPCA.3の総得点との間に正の相関が見られたことから、CS種目選手の心理的競技能力を高める上で、フォーカシング的態度をバランスよく身につけることが重要であることが示唆された。

やり投げの投動作における注視の実態と注視条件間の差異

○金丸龍昇（国際武道大学大学院）、前川直也（国際武道大学）、河村剛光（順天堂大学大学院）

本研究は、やり投げの投動作における注視の実態（研究①）と、注視の教示による記録の差異があるのか（研究②）を明らかにすることを目的とした。

方法は、B大学の陸上競技者9名を対象に、教示なしと教示あり（やり、地面、上空）の試技を3試技ずつ（計12試技）実施させ、リリース局面最後の左脚接地時を基準（0歩）として5歩目以降からアイマークレコーダー（nac社、EMR9）で注視を計測した。なお、注視の定義は、村中（2018）の先行研究と同様に0.05sec以上視線が停留した場合とした。また、アンケート調査にて、各教示の投げやすさを回答させた。

その結果、研究①では、4～3歩目以降の歩数間で上空を注視している割合が、地面、やりよりも高かった。研究②では、各教示の投てき記録に差はみられなかった。また、アンケート結果では、やりを注視させる教示は投げやすい回答が多く、地面を注視させる教示は投げにくい回答が多かった。

＜実践研究＞

レクリエーションスクーバダイビング中の呼吸法と心理状態の改善—熟練ダイバーによる事例研究—

○麓正樹（東京国際大学）、田井健太郎（群馬大学）、赤池行平（東京国際大学）、小川幸代（東京国際大学）

レクリエーションスクーバダイビングが精神的健康の改善に貢献することが報告されている。その理由として、ダイビング中には一般的にゆっくりとした深い呼吸を継続することがあげられているが、具体的な呼吸方法は調べられていない。そこで本研究では、スクーバダイビングに熟練したダイバーの呼吸法について調べた。被験者は熟練ダイバー2名であった。被験者は最大深度約8mまでの範囲で20～30分のダイビングを行った。ダイビング中にデジタルビデオで顔を断続的に撮影し、レギュレーターから漏れでる気泡から呼吸時間の測定を行った。また、無線筋電図センサを用いて腹筋の筋電図を測定した。さらにダイビング前と直後、30分後に心理テスト（POMS）を実施した。その結果、入水後と離水前の水面付近と比べて海底付近を泳いでいる最中の呼吸時間は延長した。1名の被験者については呼気中に漸増する腹筋筋電図活動を観察した。心理テストの結果に関しては、活気の増加と緊張不安の軽減があった。以上の結果から、熟練したダイビングのインストラクターのダイビング中には、ゆっくりとした呼吸が行われており、気分の改善を得られる可能性が示唆された。

運動中の簡易的な眼球運動・視線計測システムの提案

○下永田修二、佐野智樹（千葉大学）、浜山純一、安永雄貴、長谷川迅平（千葉大学大学院）、來海郁（筑波大学体育系）、吉田和人（順天堂大学）

眼球運動・視線の研究は近年、複数の計測方法が提案され、視線インターフェースとしての応用が期待される時代になってきている。しかし、これらは静的状況での測定がほとんどであり、スポーツ・身体活動中の視線計測は、ワイヤレス計測システムも含め計測方法の開発が続いている。そこで本研究は、ハードル走およびマット運動の倒立前転など全身運動中の眼球運動・視線計測を試み、簡易的な装置・アプリを組み合わせることによる眼球運動・視線の評価方法を提案することを目的とした。視線計測装置は3台の小型ウェアラブルカメラを用い、フェイスガードに装着したものを自作した。左右眼球カメラの静的計測においては、眼球の上下、左右方向の運動と注視点との間に高い有意な相関係数が得られた。ハードル走、倒立前転中の眼球運動・視線についてはそれぞれの特徴を見ることができ、本システムは大きな動きを伴う活動中においても眼球運動および視線について計測可能であることが示された。

東京 2020 大会のレガシーづくりに関する実践研究～日本ソフトパラフェンシング協会の活動を通じて（第3報）～

○馬場宏輝（帝京平成大学）、遠藤隆志（植草学園大学）、下永田修二（千葉大学）、藤森孝幸（敬愛大学）

第1報では、東京2020大会のレガシーとして、「ソフトパラフェンシング」を開発し、その普及の為に、「日本ソフトパラフェンシング協会（JSPFA）」を設立、公認審判員の資格認定や体験会等を実施していることを紹介した。第2報では、第1報における今後の課題を第2報の研究目的に設定し、以下の成果があったと報告した。「体験会・審判講習を通じて、ポストパラボラ世代の育成が進んでいる」「帝京平成大学では、パラスポーツサポートサークルが部に昇格した」「依頼による審判講習や体験会の実績を積み上げている」「パラスポーツフェスタちばの体験ブースが決まるなど自治体への認知度がアップした」「中級パラスポーツ指導員を目指す、池袋キャンパスの学生の育成も進んでいる」。第3報では、第2報以降の活動として、「ちば学リレー講座2023」や「ちばボランティアフォーラム2023」等でJSPFAの活動を含めた講演依頼があったことや小学校での体験授業（公認普及審判員養成講習会）が実現したこと、プロジェクトのクロージングとしての国立競技場での記念撮影を実施し、今後、プロジェクトの基本コンセプトはJSPFAが引き継ぐと説明した。

<授業研究>

体育・スポーツ指導者養成のための大学実技授業のあり方について～実技授業教材の体系化を目指して～

○伊藤清良、後藤豊、櫻井健一、川合英介（国際武道大学）

本研究の目的は、体育・スポーツ指導者養成のための実技授業の教授方法の改善に貢献することにある。

そのために、国際武道大学の実技授業から先行研究における「体育指導・評価法（器械運動）」と、本研究の「体育指導・評価法（水泳）」と「体育指導・評価法（陸上競技）」を選び出し、その授業での実践活動が発生運動学の観点から考察された。

そこで実施されている実技課題とその教授方法の有効性が検討され、さらに「創発分析能力」向上に資する実技課題や、それぞれの実技課題における教授方法が提案された。

この研究によって、体育・スポーツ指導者養成のための実技授業において、実技課題の体系化が促進されることが期待される。

オンラインを活用した実技授業（陸上競技）における実技習熟度向上に関する研究 ～陸上競技短距離走について～

○櫻井健一、吉嶺真、村山凌一（国際武道大学）

学校体育における実技系の授業は体を動かしながら、その動作や技術を体現し学んでいくものである。新しい動作や技術は実際に正しい動きを見ながら動作を行い、主観と客観によって判断しながら正しい動きを身に付けていく。

陸上競技は短距離走であれば 0.001 秒、跳躍や投擲競技であれば 1cm 単位で争う競技である。僅かな差によって勝敗が決することが多く、自分自身の体をコントロールする能力を極限まで高める必要がある種目と言える。特に短距離走は、ちょっとした動きによって走る速度が変化するものであり、正しい方法を学ぶことは競技力に直結する。実際に動きを見て、動きながら学ぶ方が効果的なのである。

しかし近年のコロナ禍により、対面での授業ができず実技を行いながら学ぶという形式が取れない期間があった。本研究では、その期間に取り組んだ実技習熟度を高める方法について検討し、その成果について明らかにした。